「序文」

──吉村騏一郎著『わが師　手島郁郎』に寄す──

１９９０年７月（1990年4月23日）

小池辰雄

手島郁郎の門下の最古参の一人であり、先生が地上を去るまで門弟として、関係がもろもろの点で極めて深かった吉村騏一郎君が、先生の生涯の前過半の伝記をついに著述された。まことに魂を込めた力作である。

この伝記は、神・キリストと先生との関わりを第一義として、先生の霊的人格と、実に劇的な足跡を丹念に忠実に記述しておられる。吉村君ならではの貴重な伝記と感じ入った次第である。しかもこれは伝記にして伝記にずで、手島さんがこの中から躍動してくる。キリストの、手島さんが全存在をもってキリストを告白し、主と共に戦っておられる。

ところで手島さんと私の関係は、『旧約知識』誌に執筆していた私の「詩篇研究」（訳と解説）に彼が非常に共感して、ぜひ熊本に来て一席講じて欲しいというご依頼が契機となって始まったものである。

１９５０年１１月３日から５日にかけて、大阿蘇のふところたる温泉の瀧見荘で聖会が開かれた、その講師として招いて下さったお手紙（１０月１５日）の中で、手島さんは、が「神の特選の人」で「一大をキリストからわる」ことを啓示された、と記しておられる。

私はこの瀧見荘の聖会で、今までの無教会山脈になかった全身的な祈りの相を発見した。正にこれだと体感し祈ったところ、私自身直ちに天界のキリストから聖霊のバプテスマを賜わった。これは私にとり信仰上の決定的な次元的飛躍となった。平伏して感謝あるのみ！

それ以来、二人は期せずして、無教会山脈をなし、大阿蘇火山系人となったのである。今秋（１９９０年秋）は幕屋のこのペンテコステ聖会の４０周年を迎えるわけで、全幕屋は天界の手島先生の大のもと、霊的火山爆発を招来せんとするものである。

手島さんという人物は全身的にものを感じ、全身的にことに当たる人であった。彼は全身で泣きなみだする。全身で笑い、全身で怒る。全身で信じ、愛する人であった。私も同質であると申したい。

手島さんと私は、い立ちも、外貌も、性格も、人生コースもそれぞれであるが、心魂のがふしぎに響和した。使徒ヨハネの書翰を基調とした手島さんの名著『聖霊の愛』を、キリスト教会一般も無教会も黙過したが、愚生はこれこそキリスト教史上の画期的な霊的なりと感じた。われわれの友情は正に聖霊が結び給うた永遠的なものである。人間的な長所短所などは問題でない。パウロが告白したように、十字架のいと聖霊の愛が一切をゆるし、乗り越えしめ、光化し給うのである。

論より証拠。いのちけで、で伝道し、キリストに投げ身し、祈り貫いて、聖霊の驚くべきみ力にあずかり、カリスマ伝道を身証した手島さんであったればこそ、日本全土はおろか、イスラエル、南北アメリカにまで幕屋は展開し続けている。

この『わが師　手島郁郎』を旗じるしとして、各地の幕屋の方々が、それぞれの在り方と使命において、にあって地道な伝道を展開し続けて下さい。

鈍器晩成の愚生は、これから何年かかるか知らぬが、わが使命を聖名ゆえに果たし、手島さんのあつき友情と祈りに応えて、天界での再会の日を望みまたん哉。

 １９９０年７月

 キリストの無者　天童これを記す